

資料

0. 現在の社会に関する認識 ~ 現在の教育環境の背景にあるもの

欲求を刺激し欲望を高め肯定する社会

常に消費を考えざるを得ないほど欲望が高められる。「モノ」から「コト」へと消費の対象がシフトしているように言われているが、本質は同じ。

効率を追求し成果を上げることを強制される社会

お金さえあれば何でもできると思わせる社会

私事化・市場化している社会

都市部のホワイトカラーをモデルとした生き方を普遍化しようとする社会

さまざまな格差（地域間，社会経済階層間，男女間など）を拡大固定化し，またそれを巧妙に隠蔽し「キレイごと」にしてしまう社会

「機会の不平等」には目を向けず，「自己責任」に帰結させようとする社会

もともと様々な“資源”を持つものにはより有利に，そうでないものにはより不利に動いている社会 = 一部の，必ずしも本人の努力によるとはいえない恵まれた人たちに有利な，そして大多数の人たちがそれと気づかないまま不利になっている社会

1. 現在の教育の方向性

現在の教育改革に見られるキー・コンセプトの変化

画一化から個性へ，暗記から思考へ，知識から体験へ，受動から創造へ，他律から自律へ，競争から共同へ，分化から総合へ，指導から支援へ

~ これらの方向を示す文言を我々は誰も頭から否定することはできないだろう。

しかし，「指導から支援」は明らかに，学校の統制機能・責任の放棄であり，

児童・生徒（場合によっては学生？）の「自己責任」に帰結させる方向を示している。

2. キャリアとは？・・・「職業」から「生き方」（ライフスタイル）へ

キャリア（career）= ワークキャリア + ライフキャリア

ワークキャリア = 仕事そのものや職業生活における変化をとらえる概念

ライフキャリア = 仕事や職業生活だけでなく，家庭生活，余暇生活，地域生活などの領域を含み，その人の生活全般をとらえる概念

キャリアの概念は「職業」の視点から「人生あるいは個人的な生き方」に視点が拡大され，より包括的になってきている

ところが・・・キャリア教育とは児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てる教育（？）

~ キャリア教育とは「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」（平成11年12月中央教育審議会答申）であり，「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」（2003年10月キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議中間まとめ）とされている。・・・ キャリア観の偏り？

3. 地域高校の実情 ~ ある地域の高校教諭のメモから

「私は僻地の高校に勤務しています。生徒は勉強に対しての意欲がなく、進路指導も大変苦労しています。生徒は楽な方楽な方へと流れ、勉強する（勉強にお金をかける）ことに親も本人も価値を感じていません。地域差ということを感じています。生まれたときから差があるといってしまうと元も子もないので誰にも言えずにいます。教育だけに限らず生活の乱れもひどく、生徒の様子に私はカルチャーショックを受けました。経済状態が苦しく、修学旅行に行くことができない生徒（いまだきいるのか？って思いますがいます）、授業料が払えない生徒、家計の足しにと子に労働させる親（学校よりバイトを優先させるなどなど、本当に信じられません。女子生徒に進学指導をすると、親（本人もそう思っている）が進学すると婚期が遅れるので行かせられないといひます。だいぶ昔の時代にタイムスリップしたようですが本気で言ひます。女性が仕事を持つ（目的を持って生きる、自分で稼ぐ）ということは無意味だといひます。そういった働く女性のモデルが生徒の生活する環境の中に存在しないから描けないのだと思ひます。結婚をせず働いている私のような女性教師は生徒たちには異様に見えるようです。（中略）

流れ作業のような仕事をする生徒へ、自己実現や女性の自立などを教育すること自体がこの田舎の存続が壊滅するから、新しい教育を生徒にする必要はない、学校にきて（登校して）いるってことだけでいいんだ、という教師がいます。今、田舎では仕事がありません。卒業した生徒は仕事に就かず、ぬくぬく家庭でご飯を食べさせてもらっています。車やバイクを買ってもらい夜中走り回っています。親は仕事がある都会へ子を出したくありません（将来面倒をみてもらうため）。仕事をしていないので体が疲れないため夜遊び回り、物を壊したり近所に迷惑をかけたり犯罪を犯します。地方分権といひって地域に権利は譲られましたが税収入の少ない地方は明るくありません。都会ではIT関連社長が何億と稼ぎ、地方では税金も払えずお金を借りる（消費者金融）人が後を絶ちません。本当に“二極化”という言葉が表れていると思ひます。これからの日本は貧富の差が広がるのでしょうか？さらに少子化。不安でしょうがありません。（以下略）」

- * 学校では不登校の問題よりも虐待などの問題が深刻化している。
- * 家庭の経済的な問題が子供たちの学校生活に与える影響が大きくなってきている
- * 裕福な層（地方では公務員等）は地域内外の移動や地域選択ができるが、そうでない層は地域にとどまるしかない？（首都圏・都市部と地方、地域内での経済階層上下の差、二重の格差が存在する）

地域福祉、地域再生プログラムの必要性

~ 学校カウンセリングを超えて学校を窓口としたソーシャルワークの方向性こそ重要

4. 生活する場のモデルとしての地域・生き方のモデルとしての大人

「社会」という「場」があり、好むと好まざるとに関わらずその中で「無名の人生」を生きるという「一般的」な生き方こそ学校で教えたい、教員として伝えたいことである。その内容が「キャリア教育」（生き方指導）である。これはすべての人の「生き方」にかかわる問題であり、単に職業や働くことだけを意味するものではない。どこで、誰と暮らし、どんなことを大切に生きる

のか、これが基本である。だれにでも、どんな場面でも「できることはある」のである。個人が「自分がおかれた場」を認識し、そこでできることを考え、その先にやりたいことが見えればハッピーである。「夢」を持つことは悪いことではないが、それ自体何の意味も持たない。夢を実現するために今何をしているか、将来の夢につながる今をどれだけ大事にしているかが重要なのである。その意味では「夢」は将来のためにあるのではなく、まさに「今」を充実させるためにあるといえる。こうしたことをきちんと指導しないと、無責任で「ありもしない絵空事」をただら追求する、自分のことしか考えない・考えられない人間を大量に作り出すことになる。

そこで、「いまを生きる場」はどこかを考えてみると、それはとくに気にもとめず毎日を過ごしている自分が生まれ育った「地域」である。地域の生活を考えること、その中で自分の暮らしを考えること、これが「生き方を考える」出発点である。学ぶこと、働くこと・・・まさに全てのことがそこに集約されているのである。また、地域で生きる大人（兄弟姉妹、両親、祖父母、教員などを含む身近な年長者）の姿はそのまま子どもたちにとって「地域で生きる」モデルになる。良くも悪くも子どもたちが自分の将来をイメージする基になる。その意味において、地域を活性化し、地域に生きる大人の生活がそれなりに成り立ってはじめて「子どもたちが夢を持って未来を語る」ことができるのである。これは、そこにすむ人全てが知恵を出し合い、地域全体で取り組む課題である。

学ぶ意欲にあふれた児童・生徒、指示待ち人間ではない自立した個人、自ら問題を発見し・解決策を探り・行動できる人間を最初から想定した発想や施策は世の中の大部分を占める「普通の人」（取り立てて優れたところがあるわけではないが、それなりに職務を遂行する人）をバカにした現実離れしたものである。こうしたごく一部の人間を理想型とした「あり方」はあくまで強者の立場に立つものであり、大多数を占める私たち「一般の」「普通の」人間が追求すべきあり方でも、実現可能なあり方でもない。現実的なモデルとは何か？それは何のことはない「与えられた場」で「与えられたこと」を「それなりに」遂行する、私たちの日常の姿である。決して特別でない私たちは、好き嫌いにかかわらず学校で「教え込む」教育を受け（あるいは教員としてそれを行ない）、それなりの知識を持って社会に出て、できることを積み重ね、それなりの社会的には無名の一生を送るのである。夢がないといえればそれまでだが・・・。繰り返すが「与えられた場」で「与えられたこと」を「それなりに」遂行する以外に一般の人の人生はあり得ない。学校で何よりも教えなければならないのはこうした現実である。